

徳富蘇峰記念館

目録 (11)

「徳富蘇峰と先覚女性(二)」

展示期間◇平成五年一月六日～十二月二十日

昨年の特別展示「徳富蘇峰と先覚女性(一)」は思いの外、来館者に興味を持っていただき、蘇峰の交友の広さを印象づけることになった。

昨年展示した主な女性は、矢島楯子、潮田千勢子、新島八重子、佐々木豊寿、下田歌子、相馬黒光、国木田信子、与謝野晶子、九条武子、岡本かの子、杉田久女等であった。今年も同じく女性からの書簡を展示した。主な女性は跡見花隠、鳩山春子、小金井喜美子、長谷川時雨、平塚らいてう、深尾須磨子、東条かつ子、高群逸枝、吉屋信子、徳富愛子、久布白落実、中村汀女等である。今年も昨年展示した女性の書簡も同時に展示してあるので、蘇峰に宛てた女性の書簡が一堂に会することになる。

蘇峰は文久三年(一八六三)から昭和三十二年十一月二日の永眠までの九十五年間に、いろいろな生き方をした女性に出会った様子がわかる。その女性達が全て先覚女性とはいえないが、自分の信念をもって生きた女性であるということは共通していることである。明治の青年が近代国家を創造していかうと意気に燃えていたその背景には、女子教育の必要を唱え、外国に視察に出かけ、女子の学校を創立し、女性の権利を求め、母親のよきな気持で芸術家を育て、文学に燃え、女性史を研究し、戦争の非情さを歌う等、それぞれの分野で模索し、実行していた女性がいたのである。微力

ではあるが、女性の真面目な社会への働きかけと関心が果たした役割を忘れてはならない。

女性の生き方は、一人として同じではない。夫の理解と支えがあつて社会に目を向けた人、夫が家事労働を一手に引き受け、夫の内助の功で研究に専念できた人、夫を信じ、誇りとして家と子を守つた人等、一人ひとり女性の像がある。矯風会の名誉会頭になった蘇峰の従姉妹久布白落実(三十七通)、大阪に矯風会を作り、後に日本婦人矯風会の会頭となつた林歌子(三十通)、蘇峰の弟蘆花の夫人徳富愛子(三十一通)の書簡については、紙面の都合上、書簡の要旨を掲載できなかったことをお断りしておく。愛子の書簡のほとんどが、昭和二年、蘆花の死亡後のものである。

蘆花は蘇峰について「富士」のなかで次のように書いている。「彼は早く女の魅力を知つた。幼少から母を大切に姉を愛した彼は、若い女に行き遣ふて洋服の衿を正す人であつた」。蘇峰が女性の力を認め、尊敬する態度は、女傑ぞろいの家庭環境で育つた蘇峰にとって本物である。

平成五年二月

〈特別展期間〉一月六日～十二月二十日までの月・水・金曜日

(二月のみ土・日曜も開館)
(八月の第三、四週は休館)

財団法人 徳富蘇峰記念塩崎財団

理事長 竹越起一

学芸員 高野静子

登場する女性たち

跡見 花蹊 (天保十一年—大正十五年)

女子教育者。歌人として有名な花蹊の筆跡はすばらしい。雰囲気のある筆勢は男性のように力強い。明治四十四年の筆であるが、墨の香りがする。花蹊は跡見女学校を創設し、女子教育に一生をささげ独身であった。大正八年貞明皇后に拝謁し、校舎施設のため、お金を拝受した。実践女学校を創設し、女子教育に君臨した下田歌子とライバル視されたこともある。日本画の跡見玉枝は伯母。

鳩山 春子 (文久三年—昭和十三年)

女子教育者。長野県松本市生れ。東京女子師範学校を出、母校の教師となる。当時外国から帰国し、英語を話せる妻を求めていた鳩山和夫と結婚。夫に任せ立派に内助の功をつとめた。春子の「自叙伝」によれば、外国生活の長かった夫の誘いで、自然に二人で外出することが多かったという。息子一郎・秀夫の教育にもきめの細かい配慮を夫婦で実行した。一郎は日本民主党の総裁、首相。秀夫は法学者、政治家となった。春子は良妻賢母の代表のように言われたが、和夫の良い協力があったからという。春子は共立女子専門学校(共立女子大)を創立した。春子の「自叙伝」の解説を書いておられる村上信彦氏が、私の書きたいことを書いておられるので、その文章を引用させていただく。——「明治三十四年九月、国木田独歩との暴力的結婚から逃れた佐々城信子は親戚会議で強制的な結婚を押しつけられ、アメリカへ追いやられようとしたが、その船の事務長武井勘三郎と恋におち、アメリカに上陸せず、日本に引返した。たまたま同船していてそのことを知り、スキヤンダルとして告発したのが鳩山春子であった。彼女は信

子の置かれた苦境もそれまでの事情も無視して、ただ婚約を裏切ったというだけで姦婦のレッテルを貼ったのである」。蘇峰への独歩・信子連名の書簡と、信子の母親佐々城豊寿からの「血涙禁じえず」という書簡も展示した。

小金井喜美子 (明治三年—昭和三十一年)

森鷗外の妹。鷗外、落合直文などと訳詩集『於母影』を「国民之友」に発表。「しがらみ草紙」を中心に活躍。鉄幹、晶子に歌の指導を受けた。『鷗外の思ひ出』から、鷗外の私生活を読みとることができる。

長谷川時雨 (明治十二年—昭和十六年)

女流劇作家。結婚に破れた後、文筆生活にはいった。十二歳年下の三上於菟吉と再婚。昭和三年岡田八代と雑誌「女人芸術」を創刊。美しい筆跡と美しい姿であった。

平塚らいてう (明治十九年—昭和四十六年)

明治三十九年日本女子大を卒業したらいてうは、四十一年、漱石の弟子森田草平と心中未遂事件を起こし、新聞をにぎわせた。四十四年、生田長江の援助で婦人文芸誌「青鞥」を発刊し、「新しい女」特集号をだし、「元始」、女性は大陽であった」にはじまる発刊宣言をした。大正七年には与謝野晶子と母性保護論争をおこなうなど婦人問題評論家として活躍し、婦人参政運動を展開した。高群逸枝と運動を共にしたこともあった。

蘇峰への書簡は大正十五年十月のもの一通であるが、その書きかたが単刀直入で気持がよい。草平は、らいてうとの恋愛事件に取材し『煤煙』を書き好評をえた。草平の書簡も一通あるので展示した。

深尾須磨子（明治二十一年—昭和四十九年）

大正・昭和期の詩人でエッセイスト。蘇峰を慈父と呼び、甘えている。大正十年機械技師で詩人であった夫を失い、その遺稿集を出すことを機会に「明星」から女流詩人として出発した。蘇峰に手紙があるのは大正十一年から昭和十五年の間である。その間三回ほどフランス、ローマ等に留学し、平塚らいてうなどと「新日本婦人の会」結成に力を入れた。与謝野晶子、森鷗外、岡本かの子などと付き合い、自分の詩集に蘇峰の書評を願い、いろいろ蘇峰の助力を受けている。

東条かつ子（明治二十三年—昭和五十七年）

東条英機の妻であるかつ子の書簡から、かつ子が「元始、女性は太陽であった」という平塚らいてうの言葉通りの女性と感じた。当時、戦争犯罪人の妻として、息子を失った親からの悲痛な訴えに、かつ子は苦しんだ。東条の死後密やかに生きた遺族の方々は、一言の言訳もしていない。佐藤早苗著「東条勝子の生涯—A級戦犯の妻として」（昭和六十二年 時事通信社）によって、若い時から英機とかつ子の間には多くの往復書簡があり、読むことができた。信頼しあい、愛情深い書簡に、東条の幸せを感じた。鹿子木員信が、東条のまわりには友達がいないと蘇峰に書いていたが、かつ子という妻がいたのである。三男四女を育て、独立させ、嫁がせ、孫を守り、にこやかに生きたかつ子は、立派である。戦後かつ子は「言訳をいわないこと」「質素と合理的な生活態度」とを子供たちにくりかえし言っていたという。

昭和二十三年十二月二十三日、極東軍事裁判によって、東条英機ら七人に絞首刑が執行された。かつ子の手紙は、夫が巣鴨にいた昭和二十一年から蘇峰が死亡した昭和三十二年までの間である。

高群 逸枝（明治二十七年—昭和三十九年）

女性史研究家。熊本県出身であるので蘇峰に親近感を持っていたようで、はりきって自分の仕事を報告している。一日十時間余の日課で研究に専念

し、終生かわらなかつたという。逸枝の自叙伝『火の国の女の日記』を読むと、前半の人生は自分は「しらたま乙女」で、高村智恵子のようであったとあり、後半は、家庭をないがしろにした夫が反省し、逸枝の研究に協力し、家事一切を受け持ったとある。後半の人生で逸枝は夫の献身的な保護のもとに女性史を完成していく「火の国の女」となった。「招婿婚の研究」の手書きの例言と目次を、原稿用紙十枚に細字で書き蘇峰に送っている。これでは一日十時間の勉強もうなずける根気のよさである。「火の国の女の日記」に夫婦の葛藤が描かれている。「愛する夫よさようなら」と家出をするが、もどってきたときには夫の丹前を縫う。「しらたま乙女」をはじめ、いろいろユニークな表現があるが、それほど純粹であったのであろう。蘇峰への書簡はこの時期のものである。蘇峰に「辞書は生きている間は絶えず増補する」と書いている態度は立派である。

吉屋 信子（明治二十九年—昭和四十八年）

信子は六正六年から「少女画報」に「花物語」を連載し、少女小説家として出発した。大正八年、大阪朝日新聞の募集した懸賞に「地の果まで」が当選。戦時高浜虚子に俳句を学んだ。蘇峰との出会いは大正十二年大森駅で、蘇峰から話し掛けてきたという。信子に与謝野鉄幹・晶子を紹介したのも蘇峰である。蘇峰と蘆花の兄弟の絶交には、蘇峰への理解が深かった。蘇峰晩年の熱海の晩晴草堂を訪ね、二宮の蘇峰堂にも来られた。「文章報国」を理解できるようになったという信子は、蘇峰の神髄をかきまめることのできた一人である。人は一人では淋しい。信子のさびしさは、母親が美しい子供だけを可愛いがったためともいう。吉屋信子の姪である吉屋えい子氏の「風を見ていた人」によると、信子は六正十五年から千代という女性と住む家をもったという。信子が愛し、いつも一緒にいた女性がいたのである。信子の「私の見た人」（朝日新聞社 昭和三十八年）には四十八人の人物が描かれている。それは蘇峰をはじめ、与謝野晶子、鉄幹、菊池寛、高浜虚子、徳富愛子などがでてくるが、私が「蘇峰への書簡」を読んで感じる人柄と、信子の観察が同じであることを嬉しく思う。「私の見なかつた人」として、杉田久女などを描いた『底のぬけた柄杓』がある。

中村 汀女 (明治三十三年—昭和六十三年)

蘇峰と同郷の俳人。蘇峰の晩年の俳句の添削をし、水前寺を課題として汀女と蘇峰が故郷を懐かしんで語っている。汀女は「ホトトギス」の同人であり、杉田久女などとも交流があった。

資料2

書簡№ 跡見花蹊 一八四〇—一九二六(天保十一年—大正十五年) 1通

1 明治44・10・6 封書〈発〉小石川柳町〈受〉青山南町
御尊父様の九十歳の祝の清硯、家宝にする。〔展示〕

書簡№ 鳩山春子 一八六三—一九三八(文久三年—昭和十三年) 4通

1 昭和3・2・14 封書の名刺に書き込み〈発〉小石川区音羽町〈受〉大森山王 静子宛
ご芳情感謝に堪えず、ご尊良人様にも宜しくご鶴声下さい。〔展示〕

2 昭和7・2・29 葉書印刷〈発〉小石川区音羽町〈受〉徳富蘇峰先生古希祝賀会、日本電報通信社内
出席(徳富蘇峰先生古希祝賀会 三月十三日午後四時於帝国ホテル)〔展示〕

3 昭和11・1・18 共立女子専門学校絵葉書〈発〉小石川区音羽町〈受〉銀座民友社
ご懇篤なるお言葉頂戴し光栄、深く感謝。〔展示〕

4 昭和13・5 封書印刷〈発〉神田一ツ橋一丁目〈受〉大森山王
新築校舎での生徒作品展の案内状。共立女子専門学校長 鳩山春子〔展示〕

書簡№ 小金井喜美子 一八七〇—一九五六(明治三年—昭和三十一年) 2通

1 昭和19・2・11 封書〈発〉本郷曙町〈受〉熱海 静子宛

2 本の丁寧な札状〔展示〕

昭和20・1・20 封書〈発〉本郷曙町〈受〉熱海
昨年主人の不幸に丁寧な悔状感謝。小冊子、印刷所火災のため遅れ、校正ふゆきとときであるが一部送る。〔展示〕

書簡№ 長谷川時雨 一八七九—一九四二(明治十二年—昭和十六年) 4通

1 昭和2・5・4 封書 切手なし

「近代美人伝」につきご高教くださるよし、思いがけぬ幸せ。お疲れのお目に写真がおなぐさめと送ったが、本文までお目通しいただき一層うれしい。〔展示〕

2 昭和10・2・15 封書〈発〉赤坂区檜町〈受〉大森区山王
拙著ご笑覧に供す。いつもご精励のこと、鏡としたい。〔展示〕

3 昭和11・3・12 封書〈発〉赤坂区檜町〈受〉大森区山王

先生にはお寒さなど苦にもなさらぬお元氣、拙著奉呈におもいがけないご芳書いただき、もつと勉強しようと思う。おひまの時はご高教くださいますよう。〔展示〕

4 昭和13・3・1 封書〈発〉赤坂区檜町〈受〉大森山王
書を頂きありがたい。長病し、静養中、先生のお元氣をよろこぶ。〔展示〕

書簡№ 平塚らいてう 一八八六—一九七一(明治十九年—昭和四十六年) 1通

1 大正15・10・6 封書〈発〉千歳村烏山住宅〈受〉京橋区加賀町 国民新聞社
近著「女性の言葉」送った。かつてにすぎるがご覧頂ければ、更にそれ以上にご批評いただければこの上ない幸せ。〔展示〕

森田草平 一八八一—一九四九(明治十四年—昭和二十四年) 1通

1 昭和16・8・11 封書 長文〈発〉世田谷区羽根木町〈受〉山中湖畔
近世国民史七十巻を通読し、先生から教えを受ける最も深い者の一人。信長も秀吉もすっかり御自分のものとして書いておられる。明治時代は是非先生に書上げて頂かねばならない。私は目下小牧山の役を書きつつある。先生のご返書に甘えて自分のことまで書いてし

まった。〔展示〕

書簡№ 深尾須磨子 一八八八—一九七四(明治二十一年—昭和四十九年) 17通

1 大正11・11・8 封書〈発〉小石川区丸山町〈受〉返子桜山

温情あふれるお手紙ありがたい。先生の御心を仰いでひざまづき、赤子の心からお父様と叫びたい。晶子夫人と一緒におもじしたい。

2 大正()・9・13 封書〈発〉小石川区丸山町〈受〉返子桜山、老龍庵

幼くして父を失い、今また母を亡くして京都から帰京した。七人兄妹の末の子である私、母が血の血、肉の肉である私。ありがたきお言葉の数々をいただき生きる。〔展示〕

3 大正(14)・1・21 封書〈発〉小石川区丸山町〈受〉返子桜山

与謝野夫人と一緒におもじしたいと申しながら、フランスの方に旅立つことになった。このさい是非お訪ねしてご挨拶したい、与謝野夫人からも申しつけられた。ご在宅の日を教えてください。〔展示〕

4 大正14・5・29 絵葉書〈発〉パリ〈受〉大森源蔵カ原

モンリウ公園のそばの小さな宿に落着いた。お訪ねしたとき、ご高著ありがとう。〔展示〕

5 昭和4・6・4 封書〈発〉小石川区丸山町〈受〉大森源蔵カ原

小著「侯爵の服」のご高評、感激恐縮。

6 昭和5・10・9 封書〈発〉麴町区三番町〈受〉大森源蔵カ原

帰朝以来まだしみじみとご挨拶していない。お会いして非礼をお詫びし、ご指導、ご配慮を仰ぎたい。ご都合を伺う。

7 昭和5・10・13 封書〈発〉麴町区三番町〈受〉大森源蔵カ原

今日はお会いでき、慈父の温顔と温情を示し給はり感泣の他ない。先生のお教への一言一句は神為の推進力。難業にも突進する勇氣。平川氏を指針として全力を尽くす。〔展示〕

8 昭和8・7・1 葉書印刷〈発〉麴町区三番町〈受〉大森源蔵カ原

泉の会、新町名、「麴町区富士見町」の知らせ。

9 昭和()・2・2 封書〈発〉麴町区富士見町〈受〉大森源蔵カ原

温愛を拜受し、勿体ない。別送の一卷を公にいたすことが出来た。ご高評、ご支持を伏して願う。三宅博士よりも過分の口辞を頂いた。

10 昭和10・9・4 封書〈発〉千駄ヶ谷新宿ハウス内〈受〉山中湖畔 蘇峰夫妻宛

お返事ありがたい。十日以後に民友社でお目にかかりたい。大阪では平

川清風に会った。

11 昭和10・10・24 封書〈発〉千駄ヶ谷新宿ハウス内〈受〉大森源蔵カ原

静子宛
お花を頂き勿体ないご恩情。民友社で先生の慈父の愛に浴し、太陽に慰められ、励まされた心強さを体得した。さらに勇氣百倍。〔展示〕

12 昭和(10年以降)・10・2 封書〈発〉千駄ヶ谷新宿ハウス内〈受〉大森源蔵カ原 静子宛

電話を頂き恐縮、忘恩の徒と自責の念にたえかねる。すべて拝眉のうえ。

13 昭和(10年以降)・1・27 封書〈発〉千駄ヶ谷新宿ハウス内〈受〉銀座民友社

いつに変わらぬご温愛に感激。日本、宇宙の真、善、美のためにさざや

14 昭和10・11・22 封書〈発〉千駄ヶ谷新宿ハウス内〈受〉大森源蔵カ原

蘇峰夫妻宛
ご配慮頂いた出版の義、書物展望社の斉藤昌三氏の好意により美装のものが出来た。「丹波の牧歌」の書評を「日々だより」に頂戴できたら勇氣倍

15 昭和14・5・8 葉書〈発〉ローマ〈受〉銀座民友社

加前進できる。伏してお願ひ。

16 昭和15・1・15 印刷年賀〈発〉千駄ヶ谷新宿ハウス内〈受〉大森源蔵カ原

昨年、日独伊親善協会の親善使節として、欧州を一廻した。

17 昭和15・8・14 葉書〈発〉千駄ヶ谷新宿ハウス内〈受〉山中湖畔、双宜荘 蘇峰夫妻宛

小著「旅情記」一部送る。

東条かつ子 一八九〇—一九八二(明治二十三年—昭和五十七年) 17通

1 昭和(21)・4・21 封書(発)福岡県田川郡川崎町字安宅小崎(受)熱海市蘇峰夫妻宛 消印読めず(二十一年十一月以後九州を引き揚げてゐるの
で推察)

2 本年はむづかしいことのみで鶯の音の佗しさを初めて味わった。あるじあの様に成り、先生ご身辺案じている。大石様から大かたの様子承知した。奥様にはお心づかい、重々お察しする。東条はすでに生きのびずし只今にて、覚悟しているが、一人かたでもご無事にとそののみ祈っている。深山で一部落四軒のみの静かな処で土にしたしみつつ、あるじの苦を偲び、遺家族の方々や戦災者のご苦難をしのびて、せめてもと最低度の生活の中に精一杯働いている。東条が力たらず、かく成り皆様にご迷惑おかけしいつも申しわけなく存じている。東条カツ (展示)

3 昭和22・10・24 葉書(発)世田谷区玉川用賀町(受)熱海市伊豆山
ご芳情厚く御礼。委細のことは大石様におきき下さい。先生ご自愛下さい度、令夫人様のご快復を心より祈る。

4 昭和(23)11・7以前)1・20 封書(発)玉川用賀町(受)熱海市伊豆山
蘇峰夫妻宛 消印読めず
ご芳墨に接しありがたい。大石様にご伝言したが只今ご旅行中とか。万事ご推察の通りあるじの心事は光風雪月かと存ずる。「時にあひてねかふみ楯となりませし、君が武運のありかたきかれ」東条内 (展示)

5 昭和23・11・7以前)7・20 封書 封筒欠 蘇峰夫妻宛
先生よりのお言葉に接し、申しわけなく勿体ない。奥様のご快復を祈る。私事一度是非参上して久々に親しく御機嫌うかがいたい。家族一同とにかく身体は丈夫。四月閉廷以来面会は叶わないが、巢鴨にてもいと元気に過ごしているよし、其の日まで大切のからだ、ありがたき事と存じおる。東条内 (展示)

昭和(24)・2・14 封書(発)玉川用賀町(受)熱海市伊豆山 消印読めず
奥様の七七忌に参じ、お参りさせていただき嬉しかった。八十二歳の母と、ご高齢の先生の健康をお案じている。先日はもう一度お会いする心組であったが皆様と一緒では心そのままお話できないのでそのまま帰京した。そのうちまたは是非参上したい。み国のお宝なる御身なれば復

興の目に見ゆるまで一日も永くお見届け頂き度、神かけて祈上る。私事あるじのすぎし後一日として変りなく仕事に精を出し、一日も絶えぬ甲客の方々にお礼申上る。勝子 (展示)

6 昭和25・1・7 封書(発)玉川用賀町(受)熱海市伊豆山
年末の命日にお心にかけてせられ、お言葉をたまわりありがたい。そのうちお見舞いに行く。東条かつ

7 昭和25・4・16 封書(発)玉川用賀町(受)熱海市伊豆山
大火事見舞い。地図で調べ、お邸をはじめ、川島、松井さまも難をのがれありがたい。米寿のお祝いおめでたい。御身を大切に、日ましにととのふ皇国のおすがた御覽下されたく。本年中お見舞いに参上する。私方一同それぞれの仕事につとめている。かつ子

8 昭和26・1・29 葉書(発)玉川用賀町(受)熱海市伊豆山
好機お目もじの日まで。東条内

9 昭和27・3・10 封書(発)玉川用賀町(受)熱海市伊豆山
先生の九十歳のお祝に記念品の計画を承りましたが、今の私の身としてはかかる事に一切かわならず、かげの身としてすごしている。当日のお喜びの御童顔目に浮ぶ。皇国の為の御奉公のお筆、ますますお健やかにとお祈り申し上る。東条内 (展示)

10 昭和27・8・15 11番書簡と同封
突然参上しましたのに、塩崎様のご親切でご一緒のお写真も頂戴し光栄の記念。特にご機嫌の温容に拝し嬉しかった。塩原時三郎氏の『東条メモ』がハンドブック社から最近でた。亜東書房からの『十人の將軍の最后』送る。東条内

11 昭和27・8・15 封書(発)玉川用賀町(受)熱海市伊豆山
徳富邸内 塩崎彦市宛
突然参上いたしましたのに、お快くお迎え下され、特に記念のお写真までお撮り下されありがたい。写真拝受、うれしい。貴方様の御筆蹟を拝見し、先生かしらと思うほどのご立派さ。名御秘書様としての御苦労お察し申上ります。(展示)

12 昭和27・10・7 封書(発)福岡市箱崎下村(家)町 伊藤方(受)熱海市伊藤弟死去に早速御悔み状感謝。遺族一同光栄に思う。塩崎様によるし

く。東条かつ

13 昭和(28)・12・21 封書(発)玉川用賀町(受)熱海市伊豆山 消印読めず
御尊母様の想出のご本拝受。先生のご慰勞の儘に塩崎様のご親切なお誘
いを承り楽しみにしていたが、赤松さんがお誘い下さらず惜しい事をし
た。「先生の名文あつて読売がやめられぬ」と友人が言っている。

14 昭和30・1・16 封書(発)玉川用賀町(受)熱海市伊豆山
九十三歳の新年を迎えお祝い申しあげます。皇國復興の太柱としての大
事業なされ、み國の宝。お写真とご筆蹟拝受。東条内。

15 昭和31・2・28 封書(発)玉川用賀町(受)熱海市伊豆山
お葉書ころ温たまる想い。用賀の丘の雪景色もなかなか。
昭和32・1・1 年賀(発)玉川用賀町(受)熱海市伊豆山

17 16 昭和 封筒なし
お寒いにつけご案内申し上げている。其のうちお見舞に伺う。かつ子

書籍No

1 高群逸枝 一八九四—一九六四(明治二十七年—昭和三十九年) 23通

昭和11・10・18 封書(発)世田谷区世田谷(受)大森区山王
拙著「大日本女性人名辞書」をお届けする。今後の修正に依つて必ずり
っぱなものにしてご高庇に酬いる。この後四、五巻出す。辞書は生きて
いる間は絶えず増補する。〔展示〕

2 昭和12・5・7 封書(発)世田谷区世田谷(受)大森区山王
過分のご同情を賜はり早速資料を求める。ご恩は心に銘記。(注 本文
の宛名穂積先生 本人の入れ間違いか)

3 昭和14・7・6 封書(発)世田谷区世田谷(受)大森区山王
仕事に就き、服部報公会より援助を受けることになり前途明るくなった。
今後とも宜しくお導きを。〔展示〕

4 昭和15・5・6 封書(発)世田谷区世田谷(受)大森区山王
ご尊影ありがたい。つつしんで拝受。

5 昭和15・8・7 洪水文庫の葉書(発)水俣(受)大森区山王
暑中見舞。老父の看護のためこちらに帰っている。〔展示〕

6 昭和16・12・15 封書(発)世田谷区世田谷(受)大森区山王

ラジオ中継で国民大会の講演を拝聴し感激。私事第二巻三年延期となつ
た。ご尊影を拝して精進しているが、更にご書を掲げたい。元旦に書い
てお恵み下さい。

7 昭和18・11・15 封書(発)世田谷区世田谷(受)熱海市伊豆山
大日本婦人会機関雑誌「日本婦人」に一年間連載した「日本女性伝」を
山雅房から出版することになった。右書名ご染筆の恵みを賜はりたい。
ご署名、ご印も頂き拝載したい。〔展示〕

8 昭和20・3・31 葉書 ガリバン刷り、表半分直筆(発)世田谷区世田谷
(受)熱海市伊豆山

敵機来ればカード箱とともに待避壕に入り、熊本に疎開しても資料類を
失うことあれば再起できない。二巻の脱稿を果さず動くことの本意なさ。
書物を運ぶ方法がないかぎり留る決心(ガリバン)。

9 昭和23・10・18 封書(発)世田谷区世田谷(受)熱海市伊豆山
「敗戦学校」拝受、国史の鍵を隣邦中国にあつたとするお説、深く同感。
昭和26・11・3 封書(発)世田谷区世田谷(受)熱海市伊豆山

10 熊本県の表彰につきお言葉を賜わり感激。「招婿婚の研究」も年末脱稿。
本文四百字詰二千八百枚、付録婚姻例集八百枚。十三年九カ月を費した。
出版社はあてがないが友人たちがなんとかしてくれる。来年から第三巻
「古代女性史の研究」にかかる。先生のご災難に対して言葉もない。
〔展示〕

11 昭和26・12・18 封書(発)世田谷区世田谷(受)熱海市伊豆山
「招婿婚の研究」(大日本女性史第二巻)脱稿。昭和十三年四月着手、基
礎調査十一年九カ月、執筆二年。目次と序文章案をお届けする。ご恩を
拝謝。〔展示〕

12 昭和26・12・18 封書(発)世田谷区世田谷(受)熱海市伊豆山
「招婿婚の研究」の序文、目次の詳細原稿。〔展示〕

13 昭和27・4・28 封書(発)世田谷区世田谷(受)熱海市伊豆山
「近世日本国民史」の普及版は所蔵している。その後は是非そろえるつ
もり。ことに女性史第四巻目からは史料として大きな利益をいただくこ
思ふ。

14 昭和28・1 年賀印刷(発)世田谷区世田谷(受)熱海市伊豆山

「招婿婚の研究」新年早々講談社から刊行。

15 昭和28・2・15 封書〈発〉世田谷区世田谷 〈受〉熱海市伊豆山

小著出版につき、玉詩をいただき、過分のご慈愛に対し拝謝の言葉もな
い。

16 昭和29・1 年賀印刷〈発〉世田谷区世田谷 〈受〉熱海市伊豆山

「日本女性の歩み」を書いている。環曆を迎える(印刷)。今年もお大事
に(手書き)。

17 昭和29・4・18 葉書〈発〉世田谷区世田谷 〈受〉熱海市伊豆山

「女性の歴史」(上)ご笑覧に供す。下巻は「国民史」から引用させていた
だきたく計画。講談社の窪田氏から「源頼朝」三巻頂き教えを受けた。

18 昭和30・1 年賀印刷〈発〉世田谷区世田谷 〈受〉熱海市伊豆山

昭和30・6・1 封書 保存〈発〉世田谷区世田谷 〈受〉熱海市伊豆山
「女性の歴史」届ける。国民史からいろいろ引用させていただき、あり
がたい。引用の箇所は索引にある。

19 昭和30・1 葉書年賀〈発〉世田谷区世田谷 〈受〉熱海市伊豆山

昭和30・8・11 葉書 保存〈発〉世田谷区世田谷 〈受〉熱海市伊豆山
「日本談義」誌上のご文章を拝読、病床で国民史の幕末諸巻を再読感銘
した。

20 昭和32・1 葉書年賀〈発〉世田谷区世田谷 〈受〉熱海市伊豆山

「女性の歴史」第二巻の起稿のはこびとなった。

21 昭和()・12・4 葉書〈発〉世田谷区世田谷 〈受〉熱海市伊豆山

漢詩 消印読めず。

22 昭和13・9・17 絵葉書〈発〉於上海 〈受〉大森山王

城池百戦後——漢詩。支那人だったらこの詩を思って泣くでしょう。そ
の気の毒な心をいたわって、日本にほんとに結びつきたいと考えた。

23 昭和14・12・3 封書〈発〉牛込区砂土原町 〈受〉銀座西民友社

戦禍の北支上海を行くのご批評有難う。記事よりも講演筆録を褒めてい
ただき、講演依頼者門前市をなしている。天理教百年祭の祝典の講演を
頼まれた。蘇峰先生の筆先恐るべし。〔展示〕

24 昭和18・3・18 封書 蘇峰夫妻宛 〈発〉牛込区砂土原町 〈受〉大森山王

頼まれた。蘇峰先生の筆先恐るべし。〔展示〕

三年前から「文章報国」の心持ちがようやく合点がいった。蘇峰の「文
章報国」の書を切望する。長文。〔展示〕

3 昭和4・9・25 封書 静子宛 〈発〉下落合 〈受〉大森山王

久しぶりにお会いして嬉しい。おみやげの立派なお菓子はみなで味わっ
た。横浜の母にも分配する。箱は用紙箱に利用する。徳富將軍大将のご
快復を祈る。

4 昭和5・5・15 封書〈発〉下落合 〈受〉銀座西八丁目民友社

おねだりしたご高著四部、ご署名のものを頂きうれし。特に江島事件
を拝見したくおねだりした次第。江島が単に淫婦のみでないよう祈って
材料を集めてみたが、歴史小説は身につかぬ芸と目下は手をつけない。

5 「異国点景」の序文頂けありがたい。

6 昭和6 封書「知友新稿」の原稿を送った空封筒。並木仙太郎宛

昭和7・2・26 葉書〈発〉下落合 〈受〉日本電報通信社内 徳富蘇峰先
生古希祝賀会

7 出席 三月十三日午後四時 於帝国ホテル 古希祝賀会

昭和12・6・23 封書〈発〉牛込区砂土原町 〈受〉大森山王
久しぶりにお会いしてうれしい。甘えてお願いしたご揮毫「良人の貞操」
についての永久の記念とする。

8 今後いろいろ作品をかく励みとする。

9 昭和13・8・31 絵葉書〈発〉北鮮雄基 〈受〉山中湖畔 双宜荘
ソ満国境軍の慰問に主婦の友より来ている。国境の原には秋草盛り。

10 〔展示〕

11 昭和13・9・17 絵葉書〈発〉於上海 〈受〉大森山王

城池百戦後——漢詩。支那人だったらこの詩を思って泣くでしょう。そ
の気の毒な心をいたわって、日本にほんとに結びつきたいと考えた。

12 昭和14・12・3 封書〈発〉牛込区砂土原町 〈受〉銀座西民友社

戦禍の北支上海を行くのご批評有難う。記事よりも講演筆録を褒めてい
ただき、講演依頼者門前市をなしている。天理教百年祭の祝典の講演を
頼まれた。蘇峰先生の筆先恐るべし。〔展示〕

13 昭和18・3・18 封書 蘇峰夫妻宛 〈発〉牛込区砂土原町 〈受〉大森山王

書籍№ 吉屋信子 一八九六一一九七三(明治二十九年—昭和四十八年) 13通

1 大正14・3・18 封書〈発〉大森不入斗 〈受〉大森山王

令夫人にお会いでき嬉しい。黒薔薇の二号送らせていただいた。同封の
書冊はお嬢様へ。

2 大正14・4・15 封書〈発〉大森不入斗 〈受〉大森山王

御揮毫を乞ふの記。信子は女学校時代、徳富といふお爺さんが「文章報
国」を唱えるをまことに頭の古いことであると思っていた。それが二、

色紙をおねだりし、一枚は自家用に所蔵し、一枚を文学報国会で開催中の色紙展に持参。値段が六円であるので、先生のは陳列以前に規定以上の高値で売れ、献艦資金に加える。いささか闇取り引きの罪になるが、これも国家の為。

12 昭和23・11・14 封書〈発〉鎌倉長谷大仏裏〈受〉熱海市伊豆山

徳富夫人を弔ふ「枯菊のごとくにおはし逝き給ふ」吉屋信子

13 昭和29・12・12 葉書〈発〉京の宿〈受〉熱海市伊豆山

大阪京都の「文士劇」に出演のため在京中。静子夫人の伝記とお手紙へのご返事おくれ失礼。伊豆山に参上する。

書簡Ⅱ

1 中村汀女 一九〇〇—一九八八(明治三十三年—昭和六十三年) 2通

昭和31・5・2 封書〈発〉世田谷区代田〈受〉熱海市伊豆山

先生の俳句拝見させていただき、水前寺あたりの句に感激。「橋の下水濠々とイタ躍る」がよい。どれも懐かしい句。〔展示〕

2 昭和31・6・11 封書〈発〉世田谷区代田〈受〉熱海市伊豆山

俳句の添削八句。「堂々と朴木栄え我は老ゆ」これは「朴若葉して」にする
と「我は老ゆ」が活きてくる。このお句は先生を感じさせる大ぶりなお句で好き。「風花」送る。〔展示〕

平成五年二月

学芸員 高野静子 作成